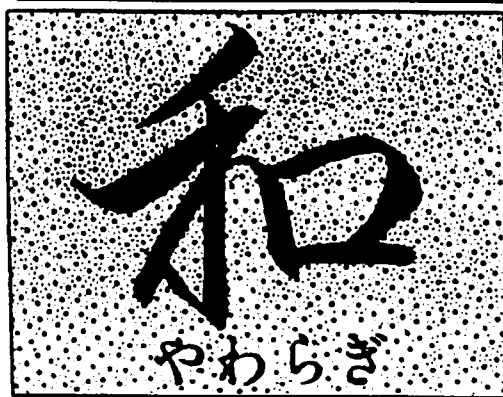




SSKP

発 行  
全国脊髄損傷者連合会  
神奈川支部  
〒246-0006 横浜市瀬谷区上瀬谷町 26-28  
電話 045-922-6324

編集人  
山崎 昇

ホームページ <http://www.max.hi-ho.ne.jp/yawaragi/>  
メールアドレス yawaragi@max.hi-ho.ne.jp

平成23年度(社)日本損害保険協会助成  
脊髄損傷者のピアマネジャー現任研修会

全脊連赤城理事の  
進行で「ケースに対  
する支援計画と記録  
の取り方」の演習が  
行われた。



家族ぐるみで  
参加。和やか  
な中で真剣に  
取り組む。

全脊連大濱副理事長による  
「相談支援専門員の要件等」  
を研修する

平成24年2月11日

支部が主管した関東甲信ブロック会。ピアマネジャー現任研修会が開催される。

講演 脊髄損傷者の内科的諸問題について …… 2  
神奈川リハビリ病院 副院長 水口 正人

講演 関東で大規模震災が発生した場合… …… 5  
社会福祉法人りとららふ  
理事長 片桐 公彦

各支部の代議員とその補欠の  
選出についての要請 …… 4

楽しかったでーす! …… 11  
ボウリング大会

# 脊髄損傷者の内科的諸問題について

自分のからだを見つめよう

講師 神奈川リハビリテーション病院

副院長 水口 正人 氏

平成23年11月27日に川崎市国際交流センターで脊髄損傷者研修会が以下にて開催された。当事者24名を含む参加者33名で神奈川リハビリテーション病院の水口副院長を講師に迎えて脊髄損傷者の内科的諸問題について拝聴した。

脊髄損傷者も歳はとるし病気にもなる。われわれ脊髄損傷者は立位や歩行が不能あるいは困難、自律神経障害、まひ領域の血流障害、そのために身体活動が後天的に低下していく。どちらが原因でどちらが結果なのか判断は難しいが症状や疾病では骨粗しょう症、低血圧あるいは過反射による高血圧、浮腫・下肢の静脈血栓症を起こしやすいのも事実である。結果として一般的に言われている生活習慣病予防の流れと一致するものの障害やまひによって自覚症状がないために発見が遅れてしまい、気づいた時には重症化しているという喜ばしくない状況になってしま

う。今回の研修ではこのような脊髄損傷者特有の内科的問題に焦点を絞り、その改善と予防のために自分のからだをもう一度見つめようという趣旨で、脊髄損傷に詳しく内科専門医でもある水口副院長に講師をお願いし研修会を開催した。

脊髄損傷者の受傷後の経過を見ると近年の医学的管理の向上で生存期間は飛躍的に伸びた。それは言い換えれば高齢化が進むという事で生活習慣に関連した内科的合併を認めるようになってきた。今回の研修は一般的な生活習慣病の検証とその予防について、またその症状での脊髄損傷者と健常者の比較データも紹介される興味深い内容であった。生活習慣病は次に心・脳血管障害を引き起こす要因になり、重篤な事態に陥る事例もいくつか紹介され、脊髄損傷受傷後の身体活動の低下による生活習慣病へのリスクが健常者と比

較してより高い事、いってよって内科的合併に注意しなければならぬ事を改めて認識する事となった。昭和30年頃までは健康を意識して考える対象は中年以降で主流は早期発見、早期治療というものであった。それが平成8年頃からは健康への意識や取り組みは子供の頃からという考え方に変わり、早期発見早期治療ではなく疾病そのものの発生を予防するという流れに変化した。早期発見を二次予防、そして病気になるらない事が一次予防だとする考え方へと変化した。

また脳卒中の致死率が低下し発病後の有病者が増加している傾向から生活習慣病の要因として高血圧、高脂血症、糖尿病の三大要因に注意しなければならぬという意識が高まった。特に水口副院長からは遺伝的要因に生活習慣

## 健康日本21 (2000~)

### 基本的な考え方

1. 生涯を通じた健康づくりの推進 (一次予防の重視)
2. 国民の健康意識の向上と具体的な目標の設定および進捗度評価に基づく健康推進事業の推進
3. 個人の健康づくりを支える社会環境づくり

### 推進方策の概要

1. 多様な経路による普及啓発
2. 各種保健事業の効率的・一体的事業の推進
3. 地方自治体・関係団体等における取り組みの支援
4. 推進組織の整備

## 脊髄損傷患者での高血圧の考え方

1. Th5より高位での高血圧症は存在しないと考える。
2. 不全例では少ないが、高血圧は存在する。
3. Th5より高位で高血圧を認めた場合、慢性腎不全等の二次性高血圧症か、自律神経過反射による一過性症を疑うべきである。
4. 血圧の乱高下がみられたら、自律神経過反射を疑う。原因は、褥瘡・尿管逆流・膀胱充満・結石・直腸充満が多く、一過りのチェックが必要である。

脊髄損傷患者での高血圧の考え方  
脊髄損傷患者での高血圧は、Th5より高位では存在しないと考える。不全例では少ないが、高血圧は存在する。Th5より高位で高血圧を認めた場合、慢性腎不全等の二次性高血圧症か、自律神経過反射による一過性症を疑うべきである。血圧の乱高下がみられたら、自律神経過反射を疑う。原因は、褥瘡・尿管逆流・膀胱充満・結石・直腸充満が多く、一過りのチェックが必要である。

下の際には自律神経過反射を疑い、その原因は褥瘡・尿路疾患(膀胱充満・結石)・直腸充満が多く一通りのチェックが必要である事である。血圧は高いとよくないが低すぎる事は心疾患イベントの発生につながるため、よい傾向であると考えてよい事という説明であった。肥満の中でも内臓脂肪型が比較するとたちが悪く、肥満予防と治療のためのDASH食を推奨する紹介があった。

DASH食とは単なるカロリー制限食とは違う Dietary Approaches to Stop Hypertension の略で果物と野菜を多くし飽和脂肪酸及び全脂肪含有量を減じた低脂肪食を指す。DASH食による減量、塩分制限、アルコール制限、運動でライフスタイルを適正にして血圧をうまくコントロールする方法を説明された。高脂血症は動脈硬化をもたらす血栓をできやすくする、だから脊髄損傷者はまひによる血流障害がある事で下肢深部静脈血栓への発病率が倍以上高い事が指摘され、その予防についても学んだ。また医療・介護関連肺炎(Incap)の説明もあった。誤嚥性肺炎、インフルエンザ等の二次性細菌性肺炎、透析などの血管内治療による耐性菌性肺炎(MRSA肺炎等)、免疫抑制薬や抗がん剤による治療中に発症した

## (生活習慣病予防十か条)

- 一 ベルトの穴 息をつけよう ウエスト85cm以内肥満
  - 二 歯磨きは虫歯を予防 H M I 22
  - 三 目標体重 BMI 20
  - 四 始めよう DASH食
  - 五 カルシウムとビタミンD も重要に
  - 六 アルコール 飲めば酔い 過ぎれば毒
  - 七 定期検査 高血圧 糖尿病 高脂血症
  - 八 時々運動 狭心症 脳梗塞
  - 九 たばこ を止める事を待とう
  - 十 体力とレベルに見合った運動 続けよう
- する。ご家族や職場等で情報を共有していただければと思います。①ベルトの穴 息をつけよう ウエスト86cm以内 ②油断は出来ない BMI 22 ③目指そう BMI 20 ④始めよう DASH食 ⑤カルシウムとビタミンDも豊富に ⑥アルコール控えめは薬過ぎれば毒 ⑦定期点検 高血圧 糖尿病 高脂血症 ⑧時々点検 狭心症 脳梗塞 ⑨たばこを止める意志を持つ ⑩体力とレベルに見合った運動 続けよう

報告・文責  
川崎協会 岩崎 利恵

(社) 全国脊髄損傷者連合会  
都道府県支部長 各位

## 公益法人移行認定申請に伴う 各支部の代議員とその補欠の選出についての要請

陽春の候、支部長の皆様方にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素から全脊連の活動に精励され、厚く御礼申し上げます。

さて、現在全脊連の最高決議機関である全国総会では、全国の各支部長が全脊連の社員としてその議決権を有しておりますが、公益法人に移行した場合は代議員選挙を導入したことから、これまでの支部長に代って新たに代議員が会員の代表としてこの法人の社員となります。その代議員の役割は次のようになります。

- (1) 社員総会に出席し、議決権を行使すること
- (2) 役員等（理事・監事）の選任・解任を行うこと
- (3) 代表理事の諮問に応じ意見を述べること

そこで、現在進行中の公益法人移行申請作業に伴って、各支部は各支部の正会員数に応じた人数の代議員とその補欠（1人又は2人以上）を選挙によって新たに選出していただく必要があります。

各支部の代議員数は、既に3月8日付で、支部正会員数の確定に関する確認について各支部に提示したところですが、居住している都道府県に所属する正会員30人に1人の割合（正会員数31名の場合は代議員2名）で正会員の中から選出し、正会員30人未満の支部の代議員数は1人となります。

各支部での代議員選挙については、別紙代議員選出規定や実施要綱などがありますが、最初の代議員でもあり、また、未だ公益法人ではないこともあり各支部では必ずしもこれによらず支部総会の場合など、通常の支部役員選出方法を活用して代議員とその補欠を選出してもかまいません。

支部長各位には、何かとご多忙中大変恐縮に存じますが、その結果を別紙代議員選挙結果報告書に記入して来る6月末日までに本部に提出していただきますようお願いいたします。

以 上

尚、代議員の補欠とは、何らかの理由で代議員が辞任した場合の補欠としてあらかじめ決めておきます。その場合、特定の代議員の補欠として選任された場合はその代議員の氏名を記入しておくこと。また、複数の代議員に2人以上の補欠を選任した場合はその優先順位を決めておいてください。

全脊連の公益法人への移行をめざし、少しずつ組織変更が実施されるようです。  
支部総会が6月23日(土)に開催され、そこで検討事項が報告されると思います。

講演

## 関東で大規模震災が発生した場合…

～ 中越地震・東日本大震災の経験から～

社会福祉法人りとるらいふ

理事長 片桐 公彦 氏

巻頭で報告したプロジェクト会で実施された災害ボランティアの講演。障害当事者が災害に直面した場合にどのように対処すべきか示唆に富む内容でしたので掲載します。

私が東日本大震災のときにかかわった経過を少し説明させてもらいながら、それを首都圏で起きた災害へ応用できる部分があればお聞きいただければと思っています。

今回の震災、非常に大きな特徴としては、すべてが巨大なのです。通常3日ぐらいで物資が届くということも、1週間かかったとか、2週間経ってもまだ連絡が取れないというエリアはたくさんありまして、私も2週間ぐらいいはぜんぜん状況が分からないということが続きました。

でも、物資がないということは当然分かっておりま

したので、仲間とこんなプロジェクトを立ち上げたのです。「つなぐプロジェクト」というプロジェクトを立ち上げました。物資が、北のほうでぜんぜんなかったのです。新潟も、水とか食料がぜんぜんない、カップラーメンもないという状況がしばらく続きました。西のほう、愛知とか京都とか南のほう、そういう所はまだ物資があるということで、西の物資を仙台の事業所とか宮城の事業所に運んでいこう、届けようというプロジェクトを立ち上げたのです。最終的には、ガソリンの1斗缶もなくなってしまうので、西日本のほうで全部、福岡から取り寄せたりとかいうことをしました。

その物資が、位置関係を見ると分かるのですが、岩手・福島・宮城という所に、新潟を通るのが一番いいルートだったのです。中継点为新潟で、私どもの事業所にたまたま大きな倉庫があり

ての物資を集めて分配していく、そこからトラックを出して運ぶというプロジェクトを始めました。足りない物は何かということで、おむつとか水とか食料とかということ、全部、私どもの事業所のほうに集めていただいて、それを事業所にお届するという、これが私が東日本大震災でかかわったきっかけでした。

実は、このとき行くつもりはなかったのです。地元がなかなか大変だということで行くつもりなかったのですが、とある事業所、宮城県石巻市に(福)祥心会という法人がありました。これが、とんでもないことになっていたので助けとほしいということ、行くことになりました。何がどうなっていたかといいますと、このご時世に、ほぼ新品に近い入所施設がぼっかり空いているというのです。よく分からなかったわけですが、知的障害者の入所施設なんかどこも満員なのに、なぜ

空いているのだと。しかもほぼ新品であると。築10年ぐらいの建物らしいのですけれども。

なぜだといったら、実はその祥心会の入所施設、「ひたかみ園」というのですが、その園の入所施設が建て替えるという話があったのです。「新しいのに、なぜ建て替えるのですか」と聞いたら、自衛隊がありまして、ものすごい音速飛行をする飛行機があつて、やたらうるさいというのです。それで防音工事をするということになって建て替えることになったというので、取り壊して防音工事をして、入所施設を建て直すという話があった中で、1回この入所施設、空になったのです。それで、そこに入っていた50人の利用者さんは別の所の仮設の入所施設に入っていたというので、ちょうど3月11日の時点で空っぽだったのです。

この祥心会の法人の事業所は、きれいにその周りだ

け、半径300メートルぐらいの所がちょうど高い丘になっていて洪水を免れたという、ほんと奇跡的に守られた土地でした。自衛隊がヘリコプターで、どんどんそこに人を、いい方は悪いですけど落とすといくわけです。どんどんそこに落ちていく。それで、行ってみたら、そこには知的障害の方、身体障害の方、精神障害の方、介護保険対象の方とその家族、自閉症の方、みんないたということ、で、だいたいピークで80名ぐらい、その施設の中におりました。そんな状態でしたので、そこにやはり支援が必要ということで非常に大変だということが分かってきました。

このような状況の中で一番苦労したのが何かといいますと、スタッフのコーディネートネーションでした。たくさんさんの支援者が入ってきました。さらにいいますと、たくさんさんの団体も入ってきました。

す。個人は個人で勝手に入ってくるわけなのですけれども、団体は団体で、少しい方は厳しいかもしれないが、あらゆる意思というかいろいろな思いを持ってやってくるわけです。

### 「専門家という病」

例えば、全日本〇〇協会さんとかというのがあつて支部があります。支部があるので支部のホームページに「どこどこに行つて支援しました」という報告が必要なわけです。その県の恥になつてしまうわけです。それから行くわけです。そうしますと、いろいろな所でその協会さんの皆さんがいっぱいいいて、社協さんにも紹介されているのですけれども、もう行き場所もないということ、で、フラフラとここにきて「5、6人の人で良いですから、支援させていただきます」という形で来るわけなのです。もう前の日にも同じような支援があつて、という状況になります。

それで、尋常ならざる量の支援が入ってくるということが分かつて、そのときに困るのは、やはりスタッフのコーディネートネーションになつてきます。いろいろな団体が、いろいろな思想、あるいはいろいろな思想あるいは思考を持つて入ってきますので、ここは非常に難しさを感じます。それで、東北の方は非常に思慮深い方々ばかりですので、なかなか「迷惑です」といえないということもあつて、私のような第三者が入つていて仕切るということをさせてもらいました。

例えばどんなことがあるかといいますと、「専門家という病」というコラムを以前に書かせていただきました。

このひたかみ園でどんな風景があつたかといいますと、水が出ないのです。水が出ないということ、うんちやおしっこは流れるのですけれども、紙まで流れるような水量はまだ確保で

きてなかったの、うんちを拭いた、お尻を拭いた紙は、そのトイレの中にあるバケツの中に入れてしまおうというルールになっていました。水がないわけです。そこへ、看護師さんが入ってきます。2、3日ぐらいいかないわけなのですか。けれども「何と不潔な所なんだ」と。「これは早急に改善するべきである」とワーワー騒ぐわけです。それはみんな分かっているわけです、不潔だということは。でも水が流れないのでしょうがないわけなのです。2、3日しかないボランティア看護師さんがそういつて騒いでいきます。その園の方は優しいので言わないので、僕が建物の裏に呼び込んでなじるということ、ヤキを入れ廻るみたいなことをしていったのです。

看護師さんたちは専門家の見地としてそういうことをいうわけなのです。でも本音は「あんたが水持っていない」ということなるわけなのです。専門家ってやつぱりそういうふうなところではない。そういう風景がたくさんありました。私ははそれを「専門家という病」だと呼んでいるわけなのです。なんと、専門家と呼ばれている人たちの専門領域、力を発揮する環境を整えきらないと彼らの支援がつかない、なんとちっぽけな専門性なのだろうということとを、すごくこの震災で痛感しました。一方で非常に専門性を生かした多大な功績を残した方々もたくさんいらつしやいました。ただ、一方で、いわゆる専門家といわれる人たちが起こしていくトラブルは比較的多かったかなと感じました。

そんな形で支援に入ってきて、こういう形になります。皆さんもし何かの団体に所属していたり支援を受ける場合には、こういったことが起きるのです。被災施設にいろいろな支援がバラバラに入っていきます。それで、コーディネート機能が非常に重要で、「私を必ず通してくれ」という形を取りました。限定もさせていただきました。少なくとも「夜勤ができる方、ヘルパー2級以上持っている方、特に自閉症、知的障害の支援に長けている方」という形で、ある程度コントロールさせていただきました。それと「インターネットでできる方、インターネットの操作ができる方」という形で制限させてもらったことがあります。

あといくつかありまして、被災地に行つたとき、「自分の法人とやり方が違う」ということがあっても、そこはむやみに批判したりしないように」という注意をさせていたたりと、「寝袋は自分で持つてください、食料は自分で持つてきてください」というようなこと。一番注意したのは「事業所に直接電話をするな」ということを、かなり徹底させてもらいました。事業所にとつてみればこれは非常に負担です。初めて来るわけですから道も分からないので「ええと、今、近くまで来てると思ってるんですけど、どこですかね」と電話をしてきて、スタッフが子機を持つて「何か、郵便局とかその辺に見えませんか、ええと」というのを一日200回ぐらいい繰り返すわけです。こんなことやっていますと仕事にならないわけです。なので「絶対電話をするな、全部おれのところに連絡をよこしてしてくれ、それもすべてメールでお願いする」と。なぜかといいますと、ほんとに200件300件、一日で問い合わせがあるものから、やつてられないわけです。そういうことをやっています。

それから高層ビルの問題です。震災で震度6クラスで横揺れになりますと、200mくらいまで割れたガラスが飛び散るといわれておりまして、かなり大変なことになるだろうというふうなことがありますので、高層ビルの問題なんかは首都圏では結構大きいだろうと思います。倒壊すること、今の設計上ないといわれていますが、しなるようにあえて設計されているのです。あえて、しなるように設計されておりますので、上の階の揺れは相当ひどいと思います。倒壊することはないといわれていますが、やはり、揺れたはずみに机がガーンとガラスに当たって、それが割れて、それが勢い余って外に飛び散っていくということがあるので、非常に危険だなと感じております。

大規模な震災が起きたときに、今こうやってお話しさせてもらっているという

ことも一つのネットワークだと思っております。

それで、いつも頭に浮かべていることは、すべて60点であるということなのです。完ぺきな支援は受けられないのです。入ってくる、外部からの専門家も100点満点の環境を求めてくるのです、自分の力が発揮できる100点満点の環境を求めてやってきました。でもそれは、そんな所はないのです。もうムチャクチャになっております。やはりすべて60点で許すと。支援する側もされる側も、60点で許すということがすごく大事であると思っております。

先に事例で示しました石巻市の（福）祥心会で見たときに、知的障害の方もいらつしやいました、身体障害の方もいらつしやいました、精神障害の方もいらつしやいました、認知症のお年寄りもいました、要介護状態、介護保険対象の方々もたくさんいらつしやいました。その中で、大きな震

災があつたにもかかわらず、「あなたは介護保険対象者だからどこどこに行つて下さい」という形になつていきました。「知的障害があるから、あなたはどこどこに行つて下さい」という形で、どんどん行き場所がなくなつていく方をずっと見て来ました。なぜ、この人たちが一緒に支援するということ

一度、介護保険であつたり、自立支援法、今、総合福祉部会もかなりもめたという状況もありますが、もう一度やはり支援のプラットフォームとして、統合していくという話も必要なのではないかということ、今回の震災の中で感じ取ることができました。

とができるのだろうかということを、自分はずっと疑問に思つておりました。制度として、私もヒアリングの中でも少しお話しさせてもらったのですけれども、もちろんご批判もあるうかと思うのですが、今ここでもう一度、やはり「支える」ということを、「支援が必要だ」というプラットフォームで、1回、制度構築を考え直すべきではないかということ、を、ずっと最近、この震災のあと考えております。ご批判があるのを十分承知しながら、それでもあえて自分の思いをお話しさせてもらいますと、やはりもう

この国は、原発の問題が出てきましたけれども、おそらく私たちが生きている間、もしくはもつと100年先も200年先も、原発とかエネルギーの問題ということを抱えながら生きていかなければいけないのだと思つていなのです。それはおそらく、この国を取り巻く、例えば、環境とか食料とかエネルギーはもちろん、政治・外交・福祉・社会保障すべてにおいて、自分たちの生き方を問い直していく、そういう震災だったのだろうと思つています。これでお話を終わらせていただきます。



県央協会

楽しかった  
です!

ボウリング大会

平成23年12月18日、神奈川県レジャーランドボウリング場において県央協会主催のボウリング大会が開催されました。

会場は厚木市にあります総合レジャー施設で、パチンコ店、ゲームセンター、飲食コーナー等があります。大きな駐車場も設置してありますが、開店後まもなくエレベーター近くの駐車場は満車になるため、念のため朝早くパイロンとロープを持ちエレベーター近くの駐車場を確保できたので、参加者皆さんの車を無事駐車できたので一安心しました。

午後1時よりゲーム開始、千葉支部からも今回2名参加して頂きました。

3チームに分かれプレーを開始し、車いすでは助走がつけられないので腕力のみでボウルを投げるしかありません。かなりの力が必要とされますが、結構ピン

が倒れ、スピア、ストライクも出て「すごいなあ」と感心しました。

また頸損や手の力のない人のため、「象さん」という補助用具を使って投げずにピンを倒す事ができる方法に5名参加しました。同じ方法でもボウルの重さや投げるタイミングによってなぜかスコアが変化します。見た目より楽しめるゲームでした。

この日は夕方からフォーラム246で懇親会も控えており、余り時間がなく少々あわただしい2ゲームになつてしまいましたが、日頃滅多にできないボウリングを楽しむことができたようです。今回参加されました会員ご家族の皆様大変お疲れさまでした。

結果は次の方々が入賞されました

○チーム一

一位(田中将さん)

二位(山崎昇さん)

三位(赤城氏のヘルパーさん)

○チーム二

一位(田辺氏の運転手さん)

二位(ポランティア山口さん)

三位(路川十九夫さん)

○象さんチーム

一位(路川みどりさん)

二位(町田安男さん)



一九七七年十二月三日第三種郵便部認可  
 二〇一二年五月十二日発行(毎月十八回)・二・三・五・六・七の日発行  
 SSKP通巻第五〇五八号



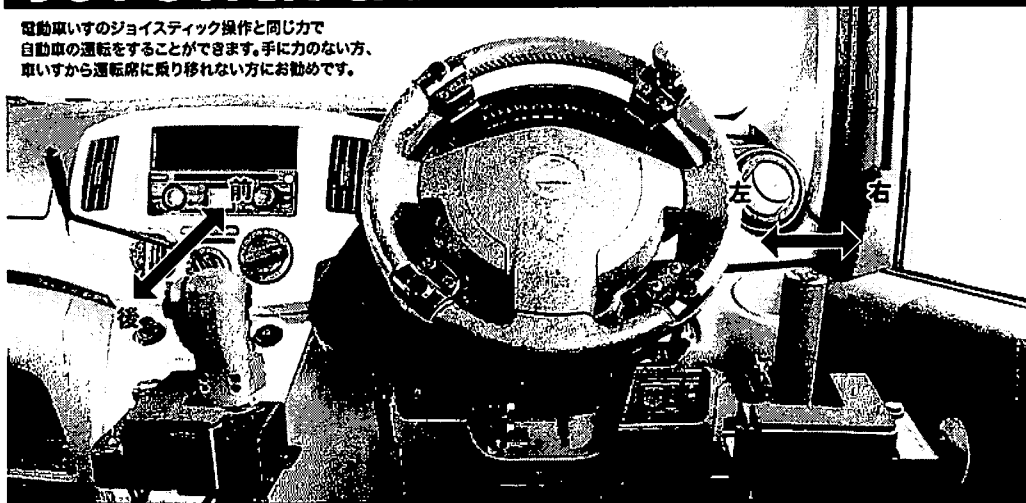
福祉車両総合メーカー  
 — Hand Control and Lift —



ニッシンは夢の車作りへ挑みます

## JOY STICK CAR ● 電動車いすに座ったまま自動車を運転したい方へ

電動車いすのジョイスティック操作と同じ力で  
 自動車の運転をすることができます。手に力のない方、  
 車いすから運転席に乗り移れない方にお勧めです。



株式会社 ニッシン自動車工業 全国ネットワークでトータルにサポートいたします。

本社工場  
 〒348-1145  
 埼玉県加須市南口456-1  
 Tel.0480-72-7221 Fax.0480-72-7223

愛知県工場  
 〒470-1161  
 愛知県豊明市栄町新左山1-755  
 Tel.0562-97-1091 Fax.0562-97-1092

NISSIN JIDOSHA GROUP



編集人

横浜市瀬谷区上瀬谷二六―二八  
 「和」編集部 山崎 昇

発行人

特定非営利活動法人 定価 三〇〇円  
 障害者団体定期刊行物協会  
 東京都世田谷区砧六―二六―二二